



この対談の相手をして頂いた多摩支部長の新田渉世さんは、友松会 44 支部の中で、最も若い支部長さんです。なにしろ平成 4 年卒で現在 47 歳ですから。更に新田さんのユニークな所は、国大在学中にプロボクサーとなり、現在も川崎市多摩区でボクシング・ジムの会長として活躍されていることです。過日のホームカミングデーでの、新田さんが講演をお聞きになった方はご存知でしょう。今日は大変お忙しい新田さんに時間を割いて頂いて、これまでの活躍の軌跡を語って頂きました。

(H.25.12.12)

リングが教室 ボクシングに賭けた私の人生

語り手 新田 渉世（平成 4 年-1992 卒）

聞き手 黒川 鈴谷（昭和 35 年-1960 卒）

黒川 先ほど頂いた新田さんの名刺を見ると、川崎新田ボクシングジムの会長の他に、日本プロボクシング協会と東日本ボクシング協会の事務局長をなさっていて、大変お忙しいようです。だから今日の対談は出来るだけ短い時間で、しかも内容豊かに終わりたいと思います。先日の日曜にこちらに伺った時に買った『リングが教室』という新田さんの著書を読みました。今日は、この本で詠んだことと、先日のホームカミングデーでのお話とを基にして伺っていこうと思います。

新田 先日お出でになった時は、私は用事で外に出ているのでお会いできませんでした。

黒川 あの時、トレーニングをしている人が何人かいたので、写真を撮って良いですかとマネージャーの方に訊ねましたら、日曜日はプロの選手は練習は休みで、今日来ている人はアマチュアの人なので、撮影は困ると言われましたが、そういう人もジムに来るのですね。

新田 そうです。ジムにはボクシングのプロを目指す者だけでなく、ダイエットやリハビリなどいろいろな目的を持った人が来ます。

黒川 先日の講演でもお話になったし、この本にも書いてありますが、小学校 6 年の時に「明日のジョー」というマンガを読んで感動し、ボクサーになる決心をしたとのことですが。

新田 ある日、家の近くでバザーが開かれたのです。そのバザーに行った私は古本のコーナーで何気なく一冊のマンガ本を手に入りました。それが「あしたのジョー」第 13 巻だったので。私はこのマンガにどんどん引きこまれていき、あっという間に 1 冊を読み切ってしまいました。

黒川 「明日のジョー」は、私はあまり良く読んでいないのですが、絶大な人気のあった作品らしいですね。それほど引きこまれたのは、どんな所に惹かれたからなのですか。

新田 12 歳の頃に星空を眺めていて、こんなことを考えました。「今、輝いている星の光は実は今のものではなく、ことによると何万年も前の



新田ジム最寄りの、小田急小田原線 向ヶ丘遊園駅

光で、あの星は今ではもう無くなっているのかもしれない。どんな星にも寿命がありいつかは無と化するのだ。そんな存在なのに、星にしても地球にしても人間にしても、何故生まれて来たのだろうか。」と考えたのです。

黒川 いやー、吃驚しました。私は中学生くらいではそんな形而上的なことは考えたこともありませんでしたよ。

新田 ともかく当時の私にとっては、自分の存在理由、つまり生きる意味が分からないまま生活して行くことが不安だったのです。そんな当時の私にとって「明日のジョー」の主人公矢吹丈とプロボクサー力石徹との間の友情と二人の生きざまは、大きな衝撃だったのです。

黒川 その衝撃からボクサーになることを決意したのですね。それで、具体的にはどんなことをしたのですか。

新田 ボクサーになるためには何をすれば良いか考えました。まずボクサーはパンチが強くなければならない。それから、ボクサーは減量をするので食べ過ぎないように胃袋を大きくしてはならない。リングの上では一人だから、ボクサーは孤独に強くなければならない、と考えました。

黒川 いずれもその通りだと思いますが、具体的にはどんなことをしたのですか。

新田 子どもなりにいろいろ考えました。まず家にあった古い布団を丸めてタコ糸で縫い、手製のサンドバックを作って天井から吊るし、毎日それを叩いてパンチ力強化に励みました。次に胃袋を大きくしないためには弁当はいつも半分しか食べず、なるべく空腹でいるように心がけました。



黒川 パンチ力強化で布団のサンドバックを叩くのは、おもしろそうだから私にも出来るでしょうが、弁当を半分しか食べないと言うのは絶対駄目ですね。

新田 私の家はサラリーマン家庭で、裕福ではないにしてもそれなりの生活には恵まれていたので、暖かい布団と温かい食事とに縁を切らないと強いボクサーにはなれないと、家出を決意しました。

黒川 えーっ、家出までしたのですか。まだ小学生でしょう。

新田 小学生でも私の決心は固く、ある晩に数枚の着替えと僅かな小銭を小さなずだ袋に詰め込み、家を出ました。

黒川 本当に家出したのですか。ずいぶん意志強固ですね。それにしてもなぜリュックやバックでなく、ずだ袋なのですか。

新田 それは「明日のジョー」の中で、矢吹丈が持っていたのが「ずだ袋」だったからです。気分はもうすっかり矢吹丈でした。

黒川 失礼、思わず笑ってしまいました。それで、結果はどうなったのですか。家出は成功したのですか。

新田 いや、失敗しました。夜中に商店街をウロウロしていたら近所のオジサンに見つかって、家に連れ戻されました。どうやら近所に人たちが手分けして探してくれたようですね。家に戻ると近所の人たちに囲まれて、母が泣いていました。泣いている母を見て、悲しませてしまったことは反省しました。そこで家出をしなくてもボクサーには成れると思い、家出は中止しました。

- 黒川 それは小学生の時ですね。中学時代はどうしていましたか。
- 新田 相変わらず毎日手製のサンドバッグを叩き、食事制限をしながらボクサーになることを夢見ていました。足には鉛の入ったサポーターを着け、1日24時間の全てをボクサーになるためのトレーニングに励みました。孤独に強くなるために周囲から白い目で見られることをしようと想着て、中間試験の解答用紙は全て白紙で出し、宿題は一切やってこない、授業は抜け出して体育館でお昼寝、教室では壁に向かってナイフ投げの練習をしました。
- 黒川 いや、これは教師から見れば大変なワルですね。しかもいわば確信犯だから手に負えない。
- 新田 当然学校の成績は1と2です。そしてある日、母親が学校に呼び出されました。私も同席して叱られたのですが、計算通り誰にも相手にされず、孤独になれると思いました。
- 黒川 お母さんは困ったでしょうし、悲しかったと思いますよ。
- 新田 中学での様子から、私が完全にグレてしまったと思った両親は、秦野市に家を購入して転居しました。牛やニワトリなどの家畜が身近にいる田舎で、家からは富士や丹沢が一望できる環境の良い土地でした。そういう環境で、少しでもまともな学校生活を送って欲しかったのでしょ。
- 黒川 でも中学卒業のあとは高校に進学したのでしょうか。国大を卒業しているのですからね。
- 新田 私は中学を卒業したら、働きながらボクシングに打ち込むつもりでいたので、高校に進学するつもりはありませんでした。でも「もう二度と学校の勉強をすることはないから、最後くらいビシッときめてやるか」と思い、中3の一年間は徹底的に勉強に打ち込みました。
- 黒川 でも2年間勉強しなかったのを、3年の勉強をしながら取り戻すのは大変だったでしょう。
- 新田 それまで仕事人間だった父親が、早く帰宅して家庭教師の役を務めてくれたのです。その結果、成績はガンガン伸びて行き、中間・期末の試験は一気にトップグループになりました。高校受験期を迎えた私は、その学区で一番の進学校を受験することが可能なレベルに達したのです。
- 黒川 それは良かったですね。それで素直に受験する気持ちになったのですか。
- 新田 進学に関する個人面談の席で、私は担任の先生と母親に「高校へは行かずに、ボクサーを目指します。」と言いました。目をパチクリさせていた担任の顔は、今でも覚えています。その後何度かの面談を重ねる中で、ある日、母がこう言いました。「高校へ行ったらボクシングは出来ないの？働きながらボクシングをやるのは皆やっていることじゃない。皆と同じじゃつまらないでしょ!？」私は「うーん、それもそうだな・・・」と思いました。後になって思えば、私の性格をうまくついた母親の作戦勝ちなのですが、この時の私は母親の説得に応じて高校受験することにしました。そして高校へは無事に進学したのですが、入学早々にその高校にはボクシング部が無いことを知り、愕然としました。
- 黒川 何処の高校にも野球部やサッカー部は有るけれど、ボクシング部は普通は無いですよ。
- 新田 そこで入学式の翌日から、ボクシング部を創る運動を始めました。「一緒にボクシング同好会やりませんか」と自分で書いたプラカードを持って、生徒の昇降口に立ったのです。
- 黒川 そりゃ、思い切ったことをしましたね。他の生徒達の反応はどうでしたか。
- 新田 「入学早々おかしいことをするヤツがいる」という感じで、皆がニヤニヤして眺めていま



した。でも毎日プラカードを持って立っていたら、一人二人と「面白そうだね」「一緒にやろうか」と、人が集まってきました。全部で十数人集まった所で、私はその名簿を持って職員室へ嘆願しに行きました。でも先生の話では、これ以上運動部を増やさないという決定をしたというのです。私も新入生ですからそれ以上のことは出来ず、仕方がないので次善の方針として、弱点だった下半身を強化するためにサッカー部に入部しました。

黒川 ところで私としては、新田さんがいつ国大に入学してくれるのかなと思っているのですが、
新田 ボクサーになるという目標が変わりはなかったのですが、大学に進学しても良いと思い始め、3年夏に部活を引退するのと同時に受験勉強をはじめました。成績は450人いた学年の中で430番台という悲惨な状況でしたので、これを挽回するには中学時代同様にかかなりの努力が必要でした。そして最終的には、「お金があまりかからない」「受験科目や合格レベルが自分に合っている」「教員という仕事にも関心がある」という理由で横浜国立大学の教育学部を受験し、保健体育専攻に入学しました。

黒川 やれやれ、これでやっと入学してくれて安心しました。ところでちょっとお尋ねしたいのですが、どうしてボクシング部の無い国大に入ったのですか。東京あたりにある体育の名門大学なら、ボクシング部も有ったのではと思うのですが。

新田 当時私が目指していたのはプロのボクサーでした。ですから大学のボクシング部は、私の視野には入っていませんでした。

黒川 なるほど分かりました。新田さんが書いたこの『リングが教室』という本によると、国大に入学するよりも前にボクシングジムに入門したとのことですね。



新田 そうです、1月の共通一次試験が終了すると同時に、3月の二次試験も待たずに東京・下北沢の金子ホボクシングジムに入門しました。18歳の冬でした。「ボクサーになる」と決意した12歳の冬から、6年が経っていました。初めてジムに行った時には、「サンドバッグがある。リングがある。ボクサーがいる」と感激しました。

黒川 大学での勉強とジムでの練習と両立させるのは大変だったでしょう。

新田 秦野の自宅から横浜の大学まで1時間30分、大学からジムまでも1時間30分かかりました。勉強と練習と両方に時間とエネルギーを取られるので、どうしても単位が足りなくなり4年で卒業出来ず、同級生よりも2年分多く授業料を納めました。つまり同級生よりも2年遅れて卒業したのです。

黒川 先日のホームカミングデーの時の講演でお聞きしましたが、入学1年後にプロテストに合格して、憧れのプロボクサーになったそうですね。

新田 はい、1987年(昭和62)5月27日、20歳の誕生日を迎える1ヶ月前にデビュー戦を迎えました。そして私はこのデビュー戦をノックアウト勝利で飾ることが出来たのです。この時には、中学・高校・大学の仲間達が大量応援に駆けつけてくれました。翌朝の新聞に、「異色の国立大生ボクサー」として私についての記事が載りました。

黒川 これで子どもの時からの夢がかなってプロボクサーとして出発した訳ですが、先日のお話

では学生時代に結婚もされたとのことですね。そのお相手は国大の女子学生かな、と思ったのですが。

新 田 いや、そうではなくて、私が通う金子ジムに来ていた私より少し年上の女性練習生です。エアロビクスのインストラクターをしている人でしたが、私はその人を見るたびに少しずつ惹かれて行き、ついにプロポーズして大学3年の10月に結婚しました。

黒 川 学生結婚ですか、羨ましいなあ。でも経済的に大変だったでしょう。新田さんの本を読んで初めて分かったのですが、ボクシングは試合と試合との間隔がずいぶん長いのですね。

新 田 そうですね。試合の相手が自動的に決まる訳ではなく、ふさわしい相手と交渉して決めなければなりません。だから試合と試合との間隔は3,4カ月から半年くらいになります。

私の場合、20歳直前でのデビュー戦から30歳の誕生日の6日前のラストファイトまで、10年間の成績は34戦23勝(17KO)9敗2分けでした。一番の誇りは29歳で東洋太平洋バンタム級のチャンピオンとなったことです。

黒 川 その試合を一つ一つお聞きしたらとても面白いのですが、そうするとこの対談はいつまでたっても終わらなくなるので、一挙に現役引退後の事をお聞きます。

引退後は、どのような道に進もうとされたのですか。

新 田 現役を引退した時に実は少し迷ったのです。妻の千春や子どもたちにずっと苦勞をさせてきた。この辺で妻や子どもの為に安定した収入の得られる道に進んだ方が良いのではないかと。教員免許を生かして先生になるのもよし、会社に勤めてサラリーマンになるのもよしと思いましたが。ところがある日、千春にそのことを話すと「そんなのつまらない。好きなことをやって欲しい」と言われました。千春は、自分のやりたいことを追い求めずに安定収入を得ようとする生き方を、私に望んではいなかったのです。

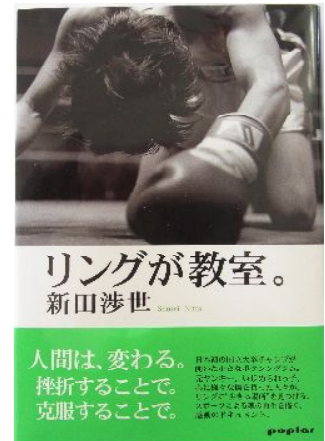
黒 川 新田夫人のその思いやりのおかげで、この本を読むと新田さんは正にやりたいことを思う存分にやっていますね。それを全て書くと大変に分量になってしまうので、現役引退後の新田さんの人生での幾つかの場面を選ばせて頂いて、それらについて書かせて頂こうと思います。まず第一にご家族でアメリカへ行かれたことから伺いましょうか。

新 田 渡米する目的は二つありました。一つはもちろんアメリカのボクシングの状況を体験し知ると言うことです。もう一つはアメリカの大学に入学して国際政治について勉強し、ジャーナリストになりたいという夢がありました。ですから渡米を考える前にも、テレビ局や新聞社などの試験を受けたりしたのです。

黒 川 しかし海外の大学に入学するのは、いろいろな点でなかなか難しいでしょうね。

新 田 各種海外留学制度、奨学金制度、ワーキングホリデーなどいろいろ調べましたが、結局私がとつた方法は、まずは現地に移住してしまおう、というものでした。やると決めたらすぐ行動というのがいつものパターンなので今回も周囲には事後報告で、われわれ家族4人はスーツケース1個とそれぞれの手荷物1個ずつだけで、サンフランシスコへ渡りました。

黒 川 サンフランシスコではいろいろ生活面でも苦勞されたようですが、滞米中に学んだ大切な



新田さんの著書「リングが教室」

ことは何だったのですか。

新 田 それは二つありました。一つにはボクシングには、人を変える力があることを実感したことです。近くのガレージジムでプロボクサーを目指している 19 歳のニカラグア出身のホセという青年がいました。この青年は 19 歳なのに、もう 3 歳になる娘がいました。ボクシングを始める前は、ホセが自分の娘を抱こうとしても娘は厭がって寄りつきませんでした。ところがホセがボクシングを始めたら、娘はホセに抱っこされるようになったのです。恐らくボクシングによってホセが変わったことを、娘は敏感に察知したのでしょう。

黒 川 子どもや動物は、相手がどんなふうか本能的に分かりますからね。ボクシングが単なる暴力ではなくて、一定のルールに基づいたスポーツであることを、直感的に感じ取ったのかも分かりませんね。

新 田 あと一つは、米国には PAL(Police Athletic League) と呼ばれる制度があり、警察が青少年育成のためにボクシングなどのスポーツ活動に対して、予算を支給します。そういう活動の中で、ボクシングは日本で言えば柔道や剣道のような位置を与えられています。つまり日本と比べて、ボクシングの社会的認知度が高いのです。これは羨ましく思いました。

黒 川 ボクシングの、そういう日本と違う面を感じながら、でも 1 年ほどで帰国してしまったのでしょうか。それは何故なのですか。現地での生活の目処は何とか付いていたのでしょうか。

新 田 ええ、初めは大変だったのですが、数か月かけてやっとの思いで和食レストランの仕事をを見つけ、なんとか生活出来るようになっていました。それなのになぜ帰国を考えたかと言うと、滞在ビザ更新の問題が有ったのです。

黒 川 ビザの更新と言うと、どういうことなのですか。

新 田 米国生活もやがて 1 年を迎えようとした頃、滞在ビザを更新しなければならない時期を迎えたのですが、移民への取り締まりが強化される中で、ビザ更新が困難になってきました。ビザを更新しないまま不法滞在で居留するという方法もあったのですが、不法滞在だと子ども達が学校に通えなくなる恐れがあります。弁護士を使って永住権を申請する方法もありますが、申請から取得まで平均 5 年くらいかかり、その間は出国することが禁止されます。いろいろ考えた挙句に帰国を決意したのです。



黒 川 帰国してからすぐこのジムを始めた訳ではなく、何年か会社勤めをなさったのでしょうか。その辺りのいきさつを伺いましょうか。

新 田 私がアメリカから帰国して間もなく、父が出張で乗り込んだ飛行機の中で突然倒れ、帰らぬ人となりました。私にとって、父はとても強く大きな存在でした。通夜の席で、父の会社の社長さんから、

「お父さんの後を継いで、この会社で頑張ってみる気はないですか」と誘われました。数日考えた上で、その会社にお世話になることにしました。

黒 川 しかし実業の世界は、これまで全く経験したことのない世界なので、大変だったでしょう。

新 田 新入社員研修として、数日間にわたり実際の担当者からレクチャーを受けましたが分かりません。それでも少しずつ同僚と会話が成立するようになって来て何とか人間関係もでき、3 年目を迎える少し前に、かつてこの会社で父と共に戦ってきた方から、「別の会社で一緒

に頑張らないか」というお手紙を頂きました。以前に父の同志だった人たちは、みなこの別の会社に転職していました。これは大きな流れかもしれないと思いました。そうして私はその別の会社に移ったのです。

黒川 話を伺っていて思うのですが、新田さんは人生のいろいろな場面で実に思い切りの良い人ですね。

新田 この会社で、私は凄い人に出会いました。他社からスカウトされてきた人なのですが、新しく設立された「資材調達本部」の部長として、手腕をふるいました。その人の仕事の進め方、優先順位の付け方、タイムマネジメント、アクションプラン作成などのノウハウは、その凄さに感心しました。この人から吸収したノウハウは後にジム立ち上げる時に大いに活用させてもらいました。

黒川 新田さんはいろいろな所で、いろいろな機会に身につけたことを、次の段階で生かしていますね。いまジムの話がちょっと出ましたが、いよいよ念願だったジムを立ち上げることになるのですか。ではいよいよジムの話をお願いしましょうか。

新田 この会社に来てから半年ほどたった頃、長岡工場に長期出張しました。長岡工場の単身赴任から一時帰省したときに、現役時代にアルバイトをしていた「割烹川信」のおかみさんから、「いつまでサラリーマンやってるのよ。人生はあっという間、ジムをやりなさいよ!」と言われたのです。そうだな三年間精一杯会社で頑張ったし、これも一つのタイミングかもしれないと思い、複雑な思いはありつつも、さっそく会社に辞表を提出しました。

黒川 でもジムを立ち上げるには、かなりの資金が必要でしょう。率直にお聞きますが、蓄えはあったのですか。

新田 いや、自己資金で賄えるほどの蓄えは、とても有りませんでした。しかし会社で辞表を出してしまった以上、後戻りすることは出来ません。いろいろ考えた挙句に、公的融資を得る方法を探しました。いくつかの制度を研究し、川崎市の「中小企業融資制度」の利用を考えたのです。

黒川 なるほど、そういう公的融資が受けられれば一番良いでしょうね。でも公的なものは条件が厳しくて、簡単には受けられないでしょう。

新田 まずは綿密な事業計画書を作成しました。全国のボクシングジムのホームページを閲覧し、会長やマネージャーさんたちへ電話でインタビューし、時には実際にジムを訪問するなどしました。そうして各ジムのコース別入会金、月会費、立地条件、営業時間、会員数、面積などの情報を一覧表にまとめて、ボクシングジムにたいする融資の妥当性をアッピ



川崎市多摩区登戸にある 新田ボクシングジム

ルしたのです。苦勞してチャンピオンになったこと、国立大を卒業し教職免許を取得していること、1年間米国でボクシングに携わったこと、3年間サラリーマンを経験したこと、開設予定地で10余年生活して人脈が確立されていることなど、有利と思われる情報は全て盛り込みました。

黒川 ずいぶん大変ですね。それで融資は無事に受けられたのですか。

新田 そりゃ、公的な融資をして貰うのですから、大変なのは当然ですよ。資料を提出してから間もなく、川崎市の「経済局産業振興部金融課」という部署から呼び出しがあり、面接に出向きました。ユニークな経歴とユニークな申請に、担当者はかなり好意的で丁寧に説明してくれました。しかし結果は後日に中小企業診断士による視察調査が行われ、その結果によって決まるとのことでした。

それにしてもちょっと不合理だと思ったのは、まだ公的融資が確定しないうちにジムの物件を決めなければならないことでした。何故なら物件の立地条件や必要経費も、融資の審査対象になるからです。でもこの「物件探し」と「診断士による視察調査」を通して、私は日本の社会でボクシングというスポーツがどの様に見られているかについて、貴重な経験をしました。



ホームカミングデイで
講演をする新田さん

黒川 と言うと、それはどんな経験だったのですか。

新田 立地条件の良い物件を1ヶ月くらいかけて見て回り、気に入った物件が見つかったので賃貸の申し込みをした数日後に断られてしまいました。「大家さんがねえ、ボクシングジムはちょっと・・・」と言うのだそうです。その後、同じような理由でかれこれ10件くらい断られ、少々狭いので初めは眼中になかった物件に最後の望みを託したのです。親しい友人の助言で、何度か話したことのある市議員に大家さんへの紹介をお願いし、一緒に大家さんと会いました。そこでなんとか物件を確保出来たのです。

黒川 そうですか。日本の社会ではボクシングがまだそういうふうに見られているのでしょうか。

新田 中小企業診断士が物件の視察と面接に来た時にも、若い診断士からこんなことを言われました。「いやあ、ボクシングジムを開業する人って、もっと怖い人かと思っていましたよ！」まあ、診断の結果は評価も悪くなく、「頑張ってください」と激励されましたが。

黒川 これはボクシングの社会への浸透度が欧米に比べてはるかに少ない日本に於いては、当然起こりうることだと思います。昔見た「長い灰色の線」というアメリカの映画の中では、ウェストポイントの陸軍士官学校で体育の正課としてボクシングの授業がありました。つまり欧米ではボクシングは日本の柔術のような武器を持たない格闘術としての伝統があるのでしょね。ところが日本では柔道や剣道に比べて、スポーツとしてのボクシングの社会的認知度はまだ低いと言える。だから「ボクシング=殴り合い=暴力的」という印象を持たれるのでしょね。

新田 診断士の物件視察と面談のあと2週間くらいして、最終審査会がありました。金融機関の融資担当から電話があり、全会一致で融資妥当の採決が出たとのことでした。私はジム開設準備の段階からアクションプランを作成し、それに沿って物事を進めてきました。これはサラリーマン時代に初めて会った企業戦士、当時よく叱られた部長のノウハウを真似し

たものです。その意味でサラリーマン時代の三年間は無駄でなかったと思います。

黒川 無事にジムのオープンにこぎつけた訳ですね。よかったですね。

新田 多くの来賓や他に現役時代にずっと応援に来てくれた中学・高校・大学の同級生達サラリーマン時代の同僚や上司、かつての父の同志の方々、金子ジムをはじめボクシング関係者、地域の人々などたくさんの方が来てくれました。無事にオープンパーティを終え、私は新たなリングでの戦いに、一歩足を踏み入れたのです。

黒川 新田さんの「新たなリングでの戦い」というのは、どんなことですか。

新田 大好きなボクシングを通して、私の理想を実現するということです。具体的には次の三つのことを目標にしました。

1. 地域に密着した活動をし、ボクシングを通じた人間教育に携わる。
2. 会員・練習生がそれぞれに持っている多様な目標の達成を目指す。
3. スタッフの心身ともに幸せな人生の実現を目指す。

1については、ジムを開くための準備をする過程で痛感したのですが、日本ではボクシングがスポーツと言うよりも、ともすれば暴力的なイメージで捉えられやすい。それをアメリカで見たような地域と繋がった活動を通して、住民の皆さんにも親しみのあるものとして行きたいと思いました。その為の第一歩として、警察と連携しました。



ジム2階のリングの横に立つ新田さん

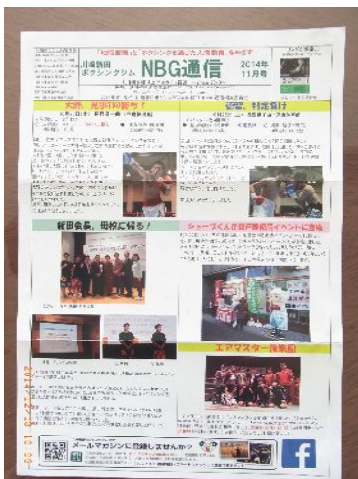
黒川 具体的にはどんなことをしたのですか。

新田 ボクサーを目指す人のトレーニングの一つとして、道路を走るロードワークがあります。

そこでこのロードワークの時に、警察や防犯協会と連携して、選手の背中に「防犯パトロール 多摩防犯協会」と書いたゼッケンを付けて走らせました。

黒川 なるほど強そうなボクシング選手が防犯活動をしているのでは、ワルイ連中にはちょっと脅威だったでしょうね。

新田 その他、私やジム所属の選手が地元の警察署や消防署で一日署長を務めたり、町で人が倒れた時にボクサーでも人を助けることが出来るように、AEDの講習会も開いています。



ジムに来る人に配る NBG 通信

また、私とジムの選手が川崎産業親善大使になって、川崎商工会議所に協力して川崎市の産業の為に活動をしたり、川崎市教委からの依頼で「いじめ暴力追放アドバイザー」として活動しています。

黒川 そのアドバイザーというのは、具体的にはどんなことをやっているのですか。

新田 国大の同級生を通しての依頼だったのですが、県下の小・中学校を年間10校程度回って、「イジメが良くないこと、本当に強いとはどういうことか」などを話しています。こういったいろいろな活動を通して、選手は社会の一員であることを学び、人の為に何かをすることの喜びを知るとい

うのは大切なことだと思います。選手にとって大切なだけでなく、日本におけるボクシングというスポーツの社会的認知度を高めるためにも、大切だと思います。

黒川 ところで2の目標はどのようなのですか。

新田 地域との連携も良いけれど、とにかくボクシングジムなのだから、選手の育成はどうなっているのだと言われそうですが、その面でももちろん成果を挙げています。フライ級の日本チャンピオンになって世界チャンピオンに挑戦した者もいますし、当ジムの選手が3年連続で全日本新人王になったりしています。また東大卒公認会計士の異色のボクサーが、昨年秋にプロデビュー戦をKOデビューで飾りました。



ホームカミングデー当日、パフォーマンスを披露する新田ジム所属の選手

プロを目指す選手だけでなく、ジムに所属するオヤジクラス・女性クラス・キッズクラス・フィットネスクラスといういろいろな立場の人たちに、ボクシングを通じた人間教育として私のモットーである、「負けに負けるな」と言うことを学んで貰っています。そして目標の2をそれぞれに実現できるならば、自然に目標3も実現できると思います。

私個人としては、静岡地裁から再審開始を認められた元プロボクサーの袴田巖さんへの支援活動を行っています。

黒川 今日はご多忙のところを、少年時代から今に至るまでのこととお話頂きましてありがとうございました。今日何う予定だった友松会多摩支部長としての御活躍の様子は、時間が無くてお聞き出来ませんでした。お話の前にチラッとお聞きしたところでは、他の支部役員がとても良く支部長さんを助けて活動されているとのことで、安心いたしました。それでは本日の対談はこれで終わりとさせていただきます。

後書き (H.27.1.7 黒川鈴谷)

実はこの対談の記録は、「ホームカミングデーでの新田渉世さんの講演」・「新田さんの著書『リングが教室』の内容」・「12月12日、川崎市多摩区の新田ジムに新田さんをお訪ねした時の話の内容」、以上三つの要素をミックスして、私が再構成したものです。そのような手法をとった理由は、一つには新田さんが我々退職者と違って非常に忙しい現役の方であり、従ってあまり長い対話の時間は取れないこと、講演と著書の内容を参考にしてかなり書くことが出来ると思ったこと、の二つによるものです。しかし、実際にやってみると著書の内容を短く簡潔にまとめることはほぼ不可能で、かなりカットしなければなりません。でも少年時代から国大の時代までは、比較的忠実に採録したつもりです。それでも不十分な所が多々ありますので、新田さんの著書を読みたい方は、登戸の新田ジムかアマゾンに申し込んで下さい。

と言うわけで、対談と銘打ちながら実は私の責任で、資料をもとに再構成したものです。ですから文責は全て私(黒川)にあります。ただし書いてあることは全て講演か著書か直接聞いた話か、どれかに基づいていますので全て真実です。以上、念のために釈明しておきます。

(川崎新田ボクシングジムの住所・電話番号 川崎市多摩区登戸 2929 Tel.044-932-4639)